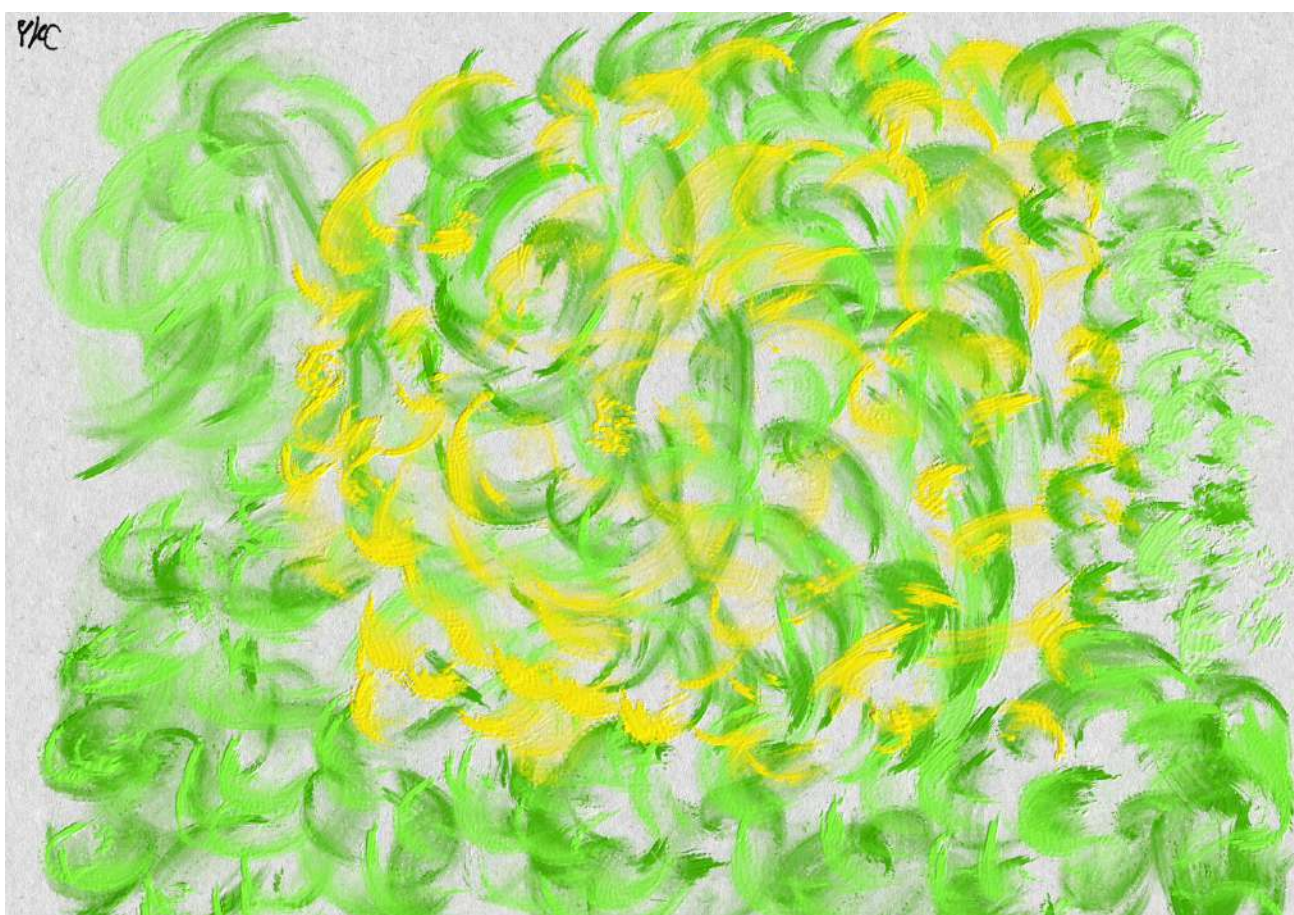

発達理論の学び舎

Back Number: Vol 300

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



No.930 ありのまま_As It Is

目次

- 5981. 夕日の祝福を浴びて
- 5982. アテネ旅行と日本旅行に持参する書籍の検討
- 5983. イギリスから届けられた書籍：包摂的な発達のあり方～2018年の国際ジャン・ピアジェ学会での出来事
- 5984. 光からではなく影から出発すること：「学ぶことは自分の中で何かが変わること」
- 5985. 善や美を体現した社会
- 5986. イギリス・中国・台湾を舞台にした今朝方の夢
- 5987. 価値論と“primacy of self-referentiality”と自己実現
- 5988. 名前に帰ること：「一次元的人間」と「不在の不在化」
- 5989. 永遠を求めようとする衝動と自己保存の衝動：今朝方の夢
- 5990. 人間と自然の共存について
- 5991. 9年間のコロナ生活とこれから
- 5992. 全ての「存在者」に居場所を与えること：俯瞰的・包摂的な新しい物語の協働創出
- 5993. 中土井遼さんとの対談を振り返って：2つの変容的なあり方の統合に向けて
- 5994. スイス旅行と秋の対談講演会に向けて：「不在化」と「なること」
- 5995. 最も「効率的」かつ「早い」成長・発達の方法
- 5996. 努力なしの最大効率 (effortless maximal efficiency)
- 5997. 「悪書は良書を駆逐する」：「マインドフル」ではなく「マインドレス」というあり方
- 5998. 新しい不動産屋へ
- 5999. 今朝方の夢
- 6000. 清々しいノーダープラントソン公園を散歩して

5981. 夕日の祝福を浴びて

時刻は午後6時を迎えた。今、何かを祝福するような夕日の輝きが、燦々とフローニンゲンの街に降り注いでいる。

ここ数日間は天気が悪く、夕日を拝むことはできなかったこともあり、夕日の存在の有り難さを感じる。フローニンゲンの街を吹き抜けるそよ風はとても優しい。その優しい風に運ばれて、数羽の鳥たちが大空を遊飛している。私もあの鳥たちのようにこの世界を遊飛しているように感じる。

中土井さんとの対談を終えて、もう4時間ぐらいになるだろうか。いまだその余韻が自分の内側に漂っている。こうした余韻を味わう心の余裕、そして時間的なゆとりがあることそのものに感謝をする必要があるだろう。この余韻はきっと自らの肥やしとなり、何らかの形となっていくか姿を現すだろう。

今日は中土井さんとの対談に向けて、対談前には一切何も食べなかった。消化にエネルギーを使いたくなかったため、心身を整える上で朝も昼も何も口にしていなかった。いつもは午前中にリンゴを1つ食べ、昼時にはバナナ1本とバイオダイナミクス農法で作られた4種類の麦のフレークに豆乳をかけたものを少々食べる。今日はそれらを食べずして対談に向かい、先ほど夕食を早めに摂ったのだが、結果として1日ほどのファスティングを行っていたことになる。

これまで毎月、欧州を中心として世界のどこかに旅行に出かけていたが、コロナの一件で、この半年間はどこにも旅行に行くことができていなかった。気がつけば半年である。ちょうど半年前の年末年始に、マルタ共和国とミラノを訪れた。再来週の木曜日には、ようやくアテネ旅行が実現する。本来であれば3月末に行く予定だったアテネも、過去4回ほどフライトがキャンセルになり、今ようやくコロナが落ち着き、今月末にやっとのことでアテネ旅行が実現する。

今年は冷夏のようにあり、フローニンゲンはずこぶる寒く、昨日はヒーターをつけようと思うほどだったのだが、打って変わってアテネは灼熱の暑さのようである。とは言え、湿度は高くないそうであり、感覚としては以前住んでいた南カリフォルニアのアーバインの夏のような気候かと思われる。

今回のアテネ旅行をきっかけにして、この半年間で自分の内側に堆積していたもの、そしてその期間にわたって発酵したものが何か思わぬ形で結晶化されるかもしれない。アテネに足を踏み入れることを通じて、何か降りてくるものがあるかもしれないという予感がする。また、何も降りてこないかもしれないという予感もある。仮に何も降りてこなかったとしても、アテネでの体験はきっと未来に何かしらの形で結晶化されて現れるだろう。未知なるものに向かうプロセス、いや未知なるものが向こうからやってくるプロセス。それが私たちの内面の成熟過程である。

本日の対談の冒頭に出てきたように、私たちの内側には未知の多大な可能性が内蔵されており、日々を水の如くたたくみながら懸命に生きることを通じて、あとはそれが開かれていくのを見守ればいいのである。それは消極的な待つという形ではなく、究極的に積極的な待つという形でなされるものである。待つことは向かうこと。向かうことは待つことなのだ。フローニンゲン:2020/7/10(金)
18:20

5982. アテネ旅行と日本旅行に持参する書籍の検討

今、夕日の祝福を全存在的に浴びている。時刻は午後7時半を迎えた。本日中に、哲学者のロイ・バスカーの書籍が2冊ほどイギリスから届く。メールによれば、後1時間以内に配達されるそうなので、到着が今から楽しみだ。明日から、思想探究においてはバスカーとハーバマスの書籍に取り掛かり、作曲理論の学習としては、20世紀のハーモニーの理論を学習したいため、“Twentieth-Century Harmony (1961)”に取り掛かろうと思う。

本日、ハーモニーに関する非常に優れた書籍“Contemporary Harmony (1966)”をようやく参考にし終えた。再来週末から始まるアテネ旅行の際に、何の書籍を持っていこうか悩むところである。アテネでも古本屋に立ち寄る予定であり、また美術館や博物館でいくつか芸術関係の文献を購入するであろうことを考えると、行きに関しては持って行くとしても何か1冊程度の書籍に留めたい。その際には音楽関係ではなく、バスカーの哲学書のうちの何かを持っていくことを今のところ考えている。アテネ旅行までに合計で14冊ほどバスカーの書籍が届くので、アテネの旅にふさわしい1冊を選んでそれを持参する。

この秋に日本に一時帰国する際に、作曲理論書を持参するかはわからないが、仮に持参するのであれば、帰りに和書をオランダに持って帰りたいため、オランダから持っていくものとしては薄い作曲理論書にしようと思う。チャイコフスキーが執筆したハーモニーに関するものか、ショーンバーグが執筆した理論書が適当だろうか。いっそのこと、日本への行きは何も書籍を持って行かなくてもいいかもしれない。毎年、日本からオランダに持って帰る書籍が随分と多いためである。

去年は、神保町の音楽関係の書籍で定評のある古賀書店さんで大量に楽譜を購入し、それらの全てをオランダに持って帰ることができず、毎日ピアノ演奏を熱心に行っている母に預かってもらうことにしていた。今回はその一部を持って帰れればと思うし、また日本で購入する予定の和書も持って帰りたいので、日本への行きに関しては本当に1冊程度の書籍を持参することにとどめるか、全く持って帰られなくてもいいぐらいだ。そのあたりはまた直前になって判断しよう。

当面は、アテネ旅行に向けた準備である。今のところ、足を運びたい場所をざっとリストアップしている程度であり、8泊9日の旅のうち、いつどこを巡るのかについては全く決めていない。いつも現地についてから色々と旅程を修正するのだが、一応仮の日程として、来週あたりにいつどこを訪れるかの目安を立てておこう。フローニンゲンとは対照的に、アテネの気温は非常に高いようだが、それはそれで夏を感じさせてくれることだろう。フローニンゲン:2020/7/10(金)19:47

5983. イギリスから届けられた書籍:包摂的な発達のあり方～2018年の国際ジャン・ピアジェ学会での出来事

つい先ほどの日記の中で、イギリスからの書籍の到着が待ち遠しいということを述べていたところ、その日記を書き終えて数分後に自宅の呼び鈴がなった。呼び鈴の音によって自分の内側の感覚が乱されることが嫌なため、普段私は呼び鈴が鳴らないように設定している。今日は事前に郵便物の配達の間がわかっていたので、呼び鈴をオンにしていた。

呼び鈴が鳴り、1階に降りてみると、配達を担当してくれた中年男性が笑顔で荷物を渡してくれた。イギリスから届いたのは、ロイ・バスカーの思想に関する4冊の書籍——(1)“Critical Realism: Essential Readings (Critical Realism: Interventions)”(2)“Enlightened Common Sense (Ontological Explorations)”(3)“The Philosophy of MetaReality (Classical Texts in Critical Realism Routledge

Critical Realism)”(4) “The Order of Natural Necessity: A Kind of Introduction to Critical Realism”——と、霊性の物質化の問題についてチョギヤム・トゥルンパが指摘した書籍“Cutting Through Spiritual Materialism”が届けられた。早速中身をパラパラとめくってみたところ、新品の書籍のなんとも言えない良い香りが漂ってきた。その香りを味わいながら、1冊1冊に、いつもながら書籍が届けられた日付を記入していった。

残り10冊の書籍はまた後日届くため、とりあえず明日からは“The Philosophy of MetaReality (Classical Texts in Critical Realism Routledge Critical Realism)”を読み進めていこうと思う。そしてアテネ旅行には、分量と読みやすさからして、“The Order of Natural Necessity: A Kind of Introduction to Critical Realism”を持参するのが良さそうだ。こちらであれば、アテネ旅行の期間に、2回か3回繰り返して読めそうであり、それによってバスキアの思想の基礎を固めることができそうだ。

今日は午後に仮眠を取っていなかったもので、夜はいつもより早めに就寝しようと思う。午後9時頃から就寝準備を始め、そのまますぐに眠りにつきたい。そのようなことを考えていると、今から2年前にふと自分にやってきた、何かが終わりを告げた瞬間の体験について思い出した。あれは、真の領域を通じて人間発達を探究することに終わりを告げた瞬間だった。

今から2年前の春に、アムステルダムで開催された国際ジャン・ピアジェ学会に私は参加していた。そこで研究発表をする幸運な機会を得て、学会発表をちょうど真ん中の日に行った。学会が開催される前に、アムステルダムに足を運ぶのが久しぶりだったので、学会会場の近くのホテルに私は前泊した。学会の前日に、2年振りにゴッホ美術館を訪れ、何冊かの画集を購入した。

その学会には、世界の名だたる研究者たちが参加しており、これまで論文や書籍を通じてでしか知り得なかった学者たちと直接会って話を聞いたり、意見交換をする機会を得た。それはそれでとても貴重な体験だったのだが、学会発表の前日あたりから、自分の心はもうどこか別のところにあるような気がしていた。実際に、学会発表の日には、もう他の研究者の発表を聞くことに関心を持っておらず、会場の一角で、私はゴッホの画集を釘付けになって眺めていた。そして、学会の最後の日には、もう発表を聞きに行くことをせず、私はフローニンゲン自宅に真っ先に帰り、自宅に到着するや否や作曲実践をしていた。

その時の体験を先ほど振り返っていた。あの時の私は、自分の中で何かが終わりを告げた音を聞いていたように思う。それは物理的な音ではなく、多分に心理的な音だったと言っていいような気がする。

あの時の私は、それをちゃんと聞きとめていた。自分が今いるところから別のところに移行する瞬間に立ち合い、移行の瞬間を体験し、最後までそれを見届けた。それは発達上の1つの通過儀礼だったのかもしれない。仮にあの瞬間を見届けることなく、急いで通り過ぎようとしていたら、今の私はまだ真の領域で、真のレンズをかけたままで人間発達を探究していたかもしれない。

その時の私は殻を破ろうとしたわけではなく、気付いたら自分はもう殻から抜け出ているのである。自分という存在はもう剥け出ているのだ。剥けた後に剥けたことを知った自分がいたのである。それは発達上の1つの要諦であるように思える。なんとなれば人は、発達後の自分の姿に思いを馳せがちだが、それは夢のようなものなのではないだろうか。発達後の自分はもう今この瞬間の自分の中にいるのだ。

耐えること。未知なものに耐えること。それは否定的な意味ではなく、そうした耐性こそが発達の包容力なのではないだろうか。そうした包容力を獲得しないままに発達を焦ること、急かすことは、分断化する世界の流れに汲みずるということの意味するのではないだろうか。発達のプロセス上、耐えながらにしてそこにあり続けるということ以上に、積極的な行動はあるのだろうか。殻が破れようとするその瞬間までそこにとどまり、その全過程と殻が破れる瞬間まで見届けること。それ以上に包容的な発達のあり方を私は知らない。フローニンゲン:2020/7/10(金)20:22

5984. 光からではなく影から出発すること:「学ぶことは自分の中で何かが変わること」

時刻は午前6時をちょうど迎えたところである。今、小鳥が鳴き声を上げていて、その優しい鳴き声に耳を傾けている。今朝は快晴とまではいかないが、空は晴れていて、朝日が雲間から見える。午後に小雨が降るようだが、それはいつときのものであり、明日と明後日は天気恵まれる。

今、無風の土曜日の朝の世界が目の前に広がっていて、その落ち着きの中に佇んでいる。そうした中、昨日の中土井さんとの対談の余韻を再度味わっている。まだその余韻が残っていて、ひよっとすると、それは今日1日中自分の内側にあり続けるかもしれない。300人ほどの方々にご参加いただ

くオンラインセミナーを初めて行い、またそもそもオンライン対談というのも3年振りぐらいのことだったので、昨日の対談は自分の中で新しい体験のように感じた。そうした新しい体験を味わい、咀嚼し、そして消化するための時間として本日を活用したい。

普段であれば、現在開催している「一瞬一生の会」の音声ファイルを土曜日に作ることが多いのだが、そちらは今日は休みにする。今日は一言も話さず、静かに時を過ごす。明日と明後日にかけて、音声ファイルをまとまった形でいくつか作成していこうと思う。

私は、いつも枕元にメモ用紙とシャーペンを置いている。就寝前や起床直後にふっと降りてくるようなアイデアや言葉があるので、それを書き留めるためにメモ用紙を置いている。昨夜、就寝に向けて横になって少ししたところで、突然1つの言葉が降りてきた。それは、「光からではなく、影から出発すること」というものだった。

先日知り合った画家の方が、ユダヤ教においては、1日は朝からではなく夜から始まるということ、言い換えれば闇から始まるということを教えてくれた。まさにそれと同じことを示唆する言葉が自分に降ってきたのである。光から闇に向かうというよりも、闇から光に向かっていくこと。

そのテーマについて考えていた時に、私が敬愛する思想家は、ことごとく闇から出発し、闇に探究の基礎を置いているということに改めて気付いた。それは自分自身の闇であり、社会の闇である。彼らはそうした闇に飲まれるのではなく、闇から強烈な光を自身と社会に照らし出す。彼ら自身が社会から虐げられた体験や阻害された体験があり、自分の存在が社会に認められないという体験などを行っている。言い換えれば、自分の存在価値を歪める社会の風潮や仕組みに直面し、それらに対しての強烈な憤りを元にして思索活動を展開している思想家に私は関心を持つようなのだ。そして、それはきっと、自分自身がそのような体験をし、現代社会に対して同様の問題意識を持っているからなのかもしれない。

今日からは、昨日届いたロイ・バスカーの書籍を読み進めていきたい。まずは、“The Philosophy of MetaReality: Creativity, Love and Freedom”から読み進めていく。本書を読み終えたら、すかさずバスカーの他の書籍に取り掛かってもいいのだが、いったんはヨルゲン・ハーバマスの名著

“Knowledge and Human Interests”に取り掛かるかもしれない。その書籍はすでに書斎の机の右隅に置いてあり、いつでも読めるようにしている。

秋の日本への一時帰国に向けて、ここからまた旺盛な読書を行っていく。来月と再来月に購入する予定の文献リストも随分と溜まってきている。ここからの旺盛な読書を通じて、自分は再びまた変わっていくだろう。

学ぶことは自分の中で何かが変わること。そのように述べたのは、一橋大学名誉教授の上原専禄先生だった。本当の学びは、自分の内側で何かが変わり、生き方が変わるものなのだ。そうした変化をもたらす読書が日々進行している。フローニンゲン:2020/7/11(土)06:22

5985. 善や美を体現した社会

—学問の意味は生きるということを自覚的に行うことである—阿部謹也

学び、そして問う日々が続いている。それはもう何か特別なことではなくて、自分の生き方そのものになっていることにふと気付く。学び、そして問いながら、毎日を自覚的に生きていく生き方は、一橋大学名誉教授の阿部謹也先生が述べる学問の本当の意味なのかもしれない。その意味で自分は、生きることを自覚的に行う者としての「学者」に少しずつ近づいているような気がする。

昨夜は就寝前に、善や美に関する公共空間の醸成について考えていた。昨日の中土井さんとの対談の中で、参加者の方からの質問として、「善や美を通じて生きるには具体的にどうしたらいいのですか？」というものがあつた。これはとても実践的な問いであり、大切なものかと思う。一方、私はこうした問いがそもそも生まれてきてしまうことに対して、この社会がこれまでどれだけ善や美というものを蔑ろにしてきたのかを見る。つまり、そうした問いが発せられてしまうほどに、人々は善や美を体現した行動や生き方がわからない社会の中に生きているのである。

例えば、一体何人の人が、「まばたきをするには具体的にどうしたらいいのですか？」と問うだろうか。まばたきは私たちにとってみれば、それを行うことが当たり前であつて、具体的な方法を問うことになしに無意識的に常日頃行っているものである。まばたきは身体的な行為であるが、突き詰めれば、善や美を体現した生き方についても同じである。それらがまだ当たり前のものになっていないか

ら、人々はその具体的な方法について質問をしてしまうのである。その観点において、やはり私たちの社会は、善や美の領域を相当に抑圧してきたのだということがわかる。

いくつもの出発点がある中で、個人としては、自分に固有の善的感觉と美的感觉から出発し、日々の行動や発言の中に善や美の要素を見出し、それを少しずつ育んでいくことが大切かと思う。全ての現象は全象限的なものであるがゆえに、いかなる行動や発言にも善や美の要素を絡めることができる。むしろ本来は、それらの要素がなければならないはずなのだ。それは忘れてしまったもの、あるいは忘れさせられてしまったものとして、もう一度自ら率先してそれらを思い出していく試みに着手していく必要があるだろう。発達とは思い出すことであるという趣旨の言葉をプラトンも残している。

善は間主観的な領域、つまりWeの領域を司るものだが、それでも個人の善意識というのは美意識と同様に、それぞれの人が固有のものを持つ。善や美に関する内的感觉を司るそうした意識は、他者から移植することは本質的に不可能なのだ。それゆえに、抑圧されてしまった自らの善意識と美意識をもう一度見つめ直し、それを起点にして、少しでも善や美が体现された行動や発言を日々行なっていくこと。そうした小さく、それでいて意義深い実践を継続させていくことが個人にとっては大事かと思う。

一方で、社会に焦点を当てると、やはり善や美を体现した行いをするのが当たり前の社会になってほしいという思いがある。善や美を体现した行為が無意識的になされるような社会、善や美を体现した意思決定が無意識的になされるような社会、対話の中に常に善や美の要素が含まれた社会。そのような社会の実現に向けた風土と仕組み作り。それが今の自分の中の最大の関心事項・実践事項なのだと思う。フローニンゲン:2020/7/11(土)06:52

5986. イギリス・中国・台湾を舞台にした今朝方の夢

時刻は午前7時を迎えた。起床直後に見えていた空模様から変化があり、今は朝日が燦々と輝いている。こうした光景からは想像し難いが、午後からは雨が降るようなので、今こうして輝きに満ちている世界を思う存分味わおう。今日はまだ今朝方の夢について振り返っていなかった。ここから夢の振り返りを行い、その後創作活動と読書に取り掛かっていこう。

夢の中で私は、駅のプラットフォームにいた。そこはイギリスの雰囲気醸し出していた。私は、小中高時代の親友(HO)と一緒に、どこかに向かうために列車に乗ろうとしていた。目的地に到着する列車は、1番のプラットフォームに到着することになっていた。

プラットフォームに置かれた時計の針を確認すると、もう列車が到着する時間だった。そのため、私たちは急いでプラットフォームに向かった。その駅のプラットフォームは数百メートルほどの短距離走を行えるぐらいの長さを持っており、一直線のそのプラットフォームの端から1番プラットフォームまでは随分と距離があるように感じられた。もう列車の姿が見えていたこともあり、私たちは大急ぎで走り出し、それでも間に合いそうになかったので、そこからはアイススケートのような形で、プラットフォーム上を滑っていくことにした。すると、私だけ列車よりも遥か先まで進んでしまい、友人は列車に乗れたのだが、私は列車に乗り損ねてしまった。

列車を逃した私はしばらくプラットフォームの上に佇んでいた。出発した列車の後ろ姿を眺め、再び我に返った時に、それでは歩いて目的地に行くかと思った。1番プラットフォームの端は外の世界とつながっていた。外の世界に出てみると、そこはやはりイギリスの街、特にロンドンのような雰囲気を持っていた。遠くの方に時計塔が見えたので、そこに向かってみることにした。そこから私は宙に浮かび、突然自分の身体が別の場所に移動していた。

気がつけば、私は中国の海岸沿いの上空にいた。そこはまだ工業化が進んでおらず、どちらかというとリゾート地の雰囲気があり、その日は優しい太陽の光もあったので、空の上はとても心地良かった。私の右手をふと見ると、私は右手に誰かの靴を持っていた。それは小学校時代に学校に指定されていたスリッパのような白い靴であり、それはとても汚かった。名前を見ると、それは私のものではなく、なぜか高校1年生の時のクラスメートのものだった。彼とは違う小学校だったこともあり、なぜ彼の靴を持っているのかが不思議であった。

すると、その彼が私の眼下に現れ、「靴をよろしく頼むね」と言われた。私は事情がうまく掴めなかったが、彼の靴をどこかに運ぶことが自分に課せられた役割だと直感的に感じていた。そうしたこともあり、私は特に彼に質問をすることをせず、少しばかり会話をした後、どこかに向かって飛び去っていった。しかし、彼の靴の匂いは少々きつく、それだけが厄介であり、靴を運び終えたら入念に手を洗おうと思っていた。

リゾート地を眼下に眺めながら気持ちよく飛んでいると、地上に1人ほど、自分が空を飛んでいることに気付いた人がいるように思えた。しかし、その中年男性はそれほど驚くこともなく、また視線をそらしてゆっくりと歩いて行った。

するといつの間にか、私は台湾の上空にいた。高度を下げようとしたところ、突然私の体は瞬間移動して、台湾のホテルの中にいた。そこはそこそこ立派なホテルだった。どうやら私は、そのホテルに小中高時代の友人数名と宿泊しているようだった。テニス部に所属していた友人の2人(TK & AF)と一緒にビュフェ形式の朝食を摂るために、ホテル1階のレストランに向かった。

そこには2つのレストランがあつて、どちらにするか悩んだ末に片方を選んだ。そこで私たちは遅めの朝食を摂り始め、気がつけばもう昼の時間も過ぎていて、午後2時ぐらいになっていた。レストランから出た後に、友人がポツリと、「今から昼食を食べよう」と述べた。たった今朝食を食べ終えたところであり、しかも時間は昼食には遅すぎる時間でもあったので、私はそれはあまり良い提案ではないと思った。しかし、もう1人の友人は、せっかく宿泊プランの中に昼食も含まれているのだから昼食も食べたいと言いだした。それでも私は昼食を摂る気になれなかったので、2人で昼食を摂ってくれと述べ、自分は先に次の目的地に向かうと述べた。

今度の目的地は同じ台湾でも違う場所にあり、今夜からはその街のホテルに宿泊することになっていた。チェックインのために、私は自分の部屋に戻って荷物をまとめる準備をしようと思った。ところが、ルームキーを部屋に置きっぱなしにしていたようであり、それに気付いたのはエレベーターに乗ろうとした時だった。しかし幸いにも、同じくエレベーターに乗ってきた綺麗な若い従業員の女性が、ルームキーがなくても、こちらの方で開錠しますと述べてくれた。そう言えば、チェックインの時に、その女性に受付を担当してもらっていたので、彼女の中で自分の顔と部屋番号が一致しているようであり、特に身分証明などをしなくても、ドアを解錠してくれることになった。

エレベーターの中で私は、もう次の場所に向かうために宙に浮かんでいて、天井に頭が着くぐらいの状態だった。その時はどういうわけか高度調節ができなかったので、エレベーターのボタンを押すことができず、その従業員の女性にボタンを押してもらった。私の部屋番号は、確か「231」だった。そう思った瞬間に、自分の体は再び瞬間移動していて、次の目的地のホテルの目の前のバス停にいた。どうやらこれからバスに乗ってどこかに移動するらしかった。

バス停に到着すると、そこには偶然ながら、中学時代のバスケット部の先輩が2人いた。何やら2人は記念撮影を熱心にしており、私の存在に気づくと、写真を撮ってくれとお願いしてきた。ところが先輩は、自分の携帯やカメラを差し出さなかったため、私は自分のスマホを取り出し、それで数枚ほど記念撮影をした。すると先輩の1人が、バス停に向かってきた観光バスの色が気に食わないと言い始めた。その先輩は別に怒っている様子ではなく、その口調は柔らかかったが、少し皮肉が混じっているように聞こえた。そのバスは薄いラベンダー色をしており、私からしてみると、とても綺麗な色のように思えた。フローニンゲン:2020/7/11(土)07:33

【追記】

改めて夢の最後の場面を読み返すと、先輩と自分がバスの色に対して異なった反応を示していたのは、人にはそれぞれ固有の美意識が備わっていることを示唆しているように思えた。フローニンゲン:2020/7/12(日)13:29

5987. 価値論と“primacy of self-referentiality”と自己実現

時刻は午後3時半を迎えた。今、フローニンゲン上空の空は晴れていて、太陽の姿が見える。昼前に一度、みぞれ混じりの横殴りの激しい雨が少しの時間降った。それを眺めながら、この間購入した新しいコーヒー豆で淹れたコーヒーを読んでおり、その味に思わず舌鼓を打った。

昼前に、イギリスからまた2冊の書籍が届いた。1つは“Roy Bhaskar: A Theory of Education”であり、もう1つは“From Science to Emancipation: Alienation and the Actuality of Enlightenment”である。

午後に仮眠を取っていると、不思議なビジョンと身体的知覚体験をした。前者に関して言えば、私はどこかの国のホテルの27階に向かおうとしていた。どうやらその階の部屋に宿泊しているようだった。27階へはエレベーターを用いて移動していた。エレベーターの上昇と共に、自分の内側で何かが上昇する感覚があった。それが後者の体験であり、その時に体全体にエネルギーの渦が流れていることに気づき、体が熱くなっているのを感じた。仮眠を取っている最中の部屋の気温は低かったため、その暖かさが際立った。

今私は、「価値論 (axiology)」を探究しながら、それを様々な領域の探究と結びつけようとしているのかもしれないと思った。価値論とは、価値の本質や価値と事実の関係を探究する哲学領域であり、価値判断の基準などを扱うものである。究極的には、永遠なる価値の探求やその確立に眼差しが向けられた領域であり、これは倫理学・美学・霊性学における価値の性質を探究する際にも鍵となる哲学領域かと思われる。

今日から読み始めたバスカーの書籍“The Philosophy of MetaReality: Creativity, Love and Freedom”は、これからの霊性学探究の基礎文献になりそうだとすぐに気づいた。本書は、バスカーが科学哲学の仕事から霊性探究に向かった転換点となる仕事が生じたものである。本書を読み進めながら、バスカーはウィルバーと並ぶメタ理論の提唱者だけあって、得るものがとても多かったのだが、1つ“primacy of self-referentiality”という言葉が印象に残っている。

それが意味しているのは、私たちは知的にも、身体的にも、霊的にも、今の自分として、今の自分から、そして今の自分を通じてしかこのリアリティでアクションできないということであり、逆にそのような形でアクションができるということである。それは私たちの限界を示しているながらも、無限の可能性を示しているように思う。ウィルバーの“spirit in action”の発想とつながるものが多分にある。

その他に考えていたことと言えば、自己を実現するというのは、他の誰かになるのではなく、絶えず自分になるということである。絶えず自分自身であり続け、それになり続けることが、絶え間ない自己実現なのだろう。バスカーの言葉を借りるならば、絶えず非二元のメタリアリティに触れながら、そこから紐解かれる自分自身に絶えず一致し続けて行くことが自己実現の永遠過程なのだと思う。

目の前の空は、絶えず同一かつ異質の空を紐解き続けている。空は空として、異質かつ同質の空がそこで紐解かれ続けている。フローニンゲン:2020/7/11(土)15:48

5988. 名前に帰ること:「一次元的人間」と「不在の不在化」

時刻は午後7時を迎えた。今、フローニンゲンの街に夕日の優しい光が降り注いでいる。いつも私はこの光景を見るたびに、心が洗われる気がする。そこには深い平穏な気持ちがある。夕日の光。それはきっと優しさでできているのだろう。

動的に静止した空。絶えず変化する空は、究極的には静止しているとみなすこともできる。変化という静止がそこにある。今の自分もそうした空のような存在ではないだろうか。絶えず変化しながらも、それでいてそこに留まり安らいでいる感覚。この感覚は大切だ。

今日の午前中にふと、結局最後は自分の名前に帰ってくることを思った。自分の名前の意味を改めて考えてみたときに、そこに自分の新たな役割を見出した。真善美が洋々と満ち溢れた社会の実現。そして、平穏さが満ち溢れた社会の実現。それらの実現に向けて日々学習と実践を続けていくことが自分が授かった使命なのだろう。

敬愛する様々な実践思想家たちのように、思想的ビジョンを提示し、その実現に向けた実践の型の提案をしていくこと。しばらくは、バスター、ハーバマス、ジジェクの認識の枠組みを借りて、彼らの目で自己と世界を眺めてみる。バスターの思想体系を探究するための文献はすでに14冊購入したこともあり、8月と9月に購入する予定の書籍は、それぞれハーバマスとジジェクに特化したものになるだろう。

真の世界、しかも深さの担保されていない真の限定的な世界に押し止められてしまった人間たち。ハーバート・マルクーゼの「一次元的人間」という言葉を現代のそうしたコンテクストに当てはめて解釈してみる。フラットランドに住む、フラットランド化させられた現代人の姿は、まさに一次元的なものである。彼らの発想と行動の全てがそうした一次元的なものとして生み出されている。善や美について語らねばならない現代の社会文化的な状況そのものを思う。善や美について語らねばならないというのは、そもそも現代社会においてそれらが決定的に欠落しているからに他ならない。

人は当たり前としてそこにあるものについては語らない。語るものは、いつも大抵不足しているものなのだ。不足しているものを語ることは、バスターが述べる「不在の不在化(absenting absence)」に当たるだろうか。不在のものを在らしめるためにそうした指摘を行っていくこと。指摘そのものがなかったものを在らしめることにつながるのであれば、それは極めて実践的だと言えないだろうか。

真正の思想や批判理論というのは、そうした性質を備えているのだろう。逆に言えば、そうした性質を備えていないものは思想や批判理論と言えないのではないかと思う。思想も批判理論も絶えず実践的であるべきだ。この現代社会から欠落してしまったことを取り戻し、そしてそれを現代のコン

テキストにおいて育むための実践的な思想と批判理論がますます求められているように感じる。フ
ローニンゲン:2020/7/11(土)19:21

5989. 永遠を求めようとする衝動と自己保存の衝動:今朝方の夢

時刻は午前5時に近づこうとしている。ここ最近では午前5時あたりまで寝ていることが多かったが、今朝は4時に起床した。外の気温が8度ほどであるためか、寝室との気温差があり、窓に水滴が付着していた。幸いにも今日は1日を通して晴れとのことだが、とても肌寒い1日であることに変わりはないだろう。再来週末のアテネ旅行までこのように肌寒い日が続き、アテネに到着したときに、その気温差に驚きそうである。

先ほどふと、人間が永遠を求めようとする衝動と自己保存の衝動について考えていた。私たちは無制約に成長・発達を遂げていくわけではなく、仮に次の発達段階に到達したとしても、必ず新たな制約条件を受け、固有の限界を持つ。

人間は永遠を求め、無限大の大きさを求めようとする衝動がありながらも、仮に無制約に自己が肥大化してしまうと、今度はその大きさに絶えられなくなってしまう。それを防ぐために自己保存の衝動が働き、固有の制約が生まれるのかもしれないと考えていた。一方、現代社会の多くの国々は金融資本主義に立脚しており—そうではない国においても、金融資本主義の影響に大なり小なり晒されており—、金融というのは改めて恐ろしいものであると思った。そこでは無限拡大が無意識的に信奉されており、実際に金融の力を借りれば、カネは無制限に膨張してしまう力を持つ。

当然ながら、各種の制度として、無限に膨張することを防ぐ仕組みはあるが、根底にあるのはやはり無限に成長拡大しようとする発想である。そうした発想に立脚した社会の中で生きる私たちは、社会が無限成長に向かおうとする衝動と、個として永遠に向かおうとする衝動にえてして絡め取られやすい危険性を絶えず抱えている。

社会が無限成長に向かおうとする衝動が、個としての永遠に向かおうとする衝動を刺激し、そして個人のそうした衝動が社会の無限成長欲求を刺激している。そのような形で、お互いの衝動がフィードバックループになっており、両者はますます巨大なものになっていく。この力が強いが故に、それに対抗する形で個人の中で自己保存の衝動、つまり自己防衛的な衝動がより強く発揮さ

れることによって、個人としても社会としても何かおかしいことになっているのではないだろうか。そのようなことを先ほど考えていた。

まずは、兎にも角にも、そうした衝動が個人と社会の内側に根付いているということに自覚的になること。そして、それらの衝動が発揮されている場面に遭遇したら、その際にも気づきの意識を当てること。そうした自覚的なあり方に基づいて、個人と社会の変容について考えていくこと。そうしたことが課せられているような気がする。

今朝方はあまり印象に残る夢を見ていなかった。覚えていることがあるとすれば、夢の中に、幼少期に見ていたアニメのキャラクターが登場したことぐらいだろうか。舞台は他の惑星であり、そこで主人公とその仲間が、ある巨大な敵と対峙していた。敵は兄弟であり、2人の敵とその部下のような敵がいて、合計3人ほどの敵だった。

最初、主人公と敵たちは冷静な形で話し合っていた。当然ながらお互いにその後には戦闘になることを知っていながらも、いきなり戦いを始めるのではなく、少しばかり準備運動がてらの会話がそこでなされていた。そのときに、主人公のキャラクターが敵の部下が用いていた銃の性質を読み取り、手から不思議な力を発揮して、その銃を変形させた。そして、その銃を切り刻んでしまったのである。

すると、新たにもう1人の部下が現れて、主人公に向けて銃を発射した。それに対して主人公は瞬間移動して、見事に銃の玉を避けた。そこからは敵の部下を地上に置き、主人公の仲間と敵の兄弟がそれぞれ一対一で空中戦を始めた。そのような夢だった。フローニンゲン:2020/7/12(日)

05:14

5990. 人間と自然の共存について

時刻は午前5時を迎えた。今、ようやく辺りが明るくなってきた。遠くの空は薄くピンクがかっている。空には少しばかり雲があるが、今日は朝日を拝むことができそうだ。

本日もまた、ロイ・バスカーの書籍を読み進めていこう。昨日から読み始めた“The Philosophy of MetaReality: Creativity, Love and Freedom”は、大いに自分を啓発してくれている。

昨日の日記でも書き留めた通り、本書は今後自分が実践霊性学を探究するときの核となる文献の1つになるだろう。科学哲学の研究から出発したバスカーが、晩年になって霊性学に目覚めたことは大変興味深く、そこに大きな共感の念を持つ。

本書は350ページを超える分量を持つが、霊性に関しては土地勘があるため、バスカーの固有の言葉の意味さえ掴んでいけば、さほど難しいことはない。そうしたことから、本日中に初読が終わるだろう。もし本日の早めに初読が終われば、そのままバスカーの他の書籍に移るのではなく、いったんハーバマスの書籍を読もうかと思う。その際には、ハーバマスの主著の1つである“Knowledge and Human Interests”に取りかかりたい。

すでにハーバマスの書籍は何冊か手元にあるが、改めて調べてみると、読みたい書籍がその他にも数多くあることに気づき、来月はハーバマスの書籍を中心にして書籍を一括注文する。9月は、アーネスト・ベッカーの書籍でまだ手元にないものや、スロベニアの哲学者スラヴォイ・ジジエクの書籍を数多く購入しようと思っている。

昨日、バスカーの書籍の中でジジエクの言葉が引用されていた。それは大変興味深いものであり、ジジエクは、「ニューエイジャーたちは、私たちは自然との繋がりを失っていると説く。だが私はそれは違うと思う。私たちはまだ「十分に」自然とのつながりを失っておらず、私たちは自然と私たち自身を一度脱自然化すべきなのだ」というような意味のことを述べていた。ジジエクの言葉を発達理論の観点から補うならば、ニューエイジャー達の発想はまだ自己と自然を十分に分化させることができず、彼らは未分化状態が生み出す人間と自然の癒着を通じて生きているのではないかという問題意識を挙げるができるかもしれない。

バスカーの言葉を用いれば、メタリアリティの次元において、つまり非二元の次元においては、確かに自然も私たちも同一なのだが、そうした認識に至る前にまずは人間と自然の差異を認める必要がある。自然は人間を超えた存在であるという側面は確かにあるはずであり、人間と自然を未分化の状態で同一視してしまうことは諸々の危険性がある。

発達心理学者のハインツ・ワーナーが提唱した発達の原理である「差異化」と「統合化」という発想がやはりここでも重要になってくる。つまり、人間と自然を未分化の状態から差異化し、分化を通った

上での統合化を果たした上で、人間と自然の深い共存が実現されるのではないかと思う。上記の発言を含め、やはりジジェクの発想や観点は面白いので、9月には彼の書籍で気になるものは全て購入しようと思う。フローニンゲン:2020/7/12(日)05:28

5991. 9年間のコロナ生活とこれから

—見たものは、見たと言え—石原吉郎

時刻は午前6時半に近づいてきている。今、本当に美しい朝日を拝むことができている。ここ数日間は雨が降りがちな日が続いていたので、早朝に朝日を拝むことが難しかった。今日は一転して、晴れ間が広がっており、今は朝日が燦々と地上に降り注いでいる。

そよ風のない無風の世界の中に、ひんやりとして心地良い世界が佇んでいる。そっと耳を澄ませてみると、小鳥たちの鳴き声が聞こえてくる。今日は朝日が照っているから、小鳥たちもさぞ気持ちの良いことだろう。彼らがあのように美しい鳴き声を上げる気持ちがよくわかる。

かつて本居宣長が一時的に書物から離れていたのと同じように、しばらく私も書物を読むことから意図的に離れていたが、ここ最近再び書に戻ってきた。書から離れようと思ったときにも内的サインがあり、書に戻ろうと思ったときにも内的促しがあった。書から離れている期間は、日記の執筆、作曲実践、絵画の創作といった活動に1日15時間ほど充てていたように思う。今はそれらの活動に充てる時間を抑え、読書にも数時間ほど時間を取っている。

現在はおっぱらイギリスの哲学者ロイ・バスカーとドイツの哲学者ヨルゲン・ハーバマス（注）の書籍を読み進めている。その他にも改めて再読しようと思っている思想家たちの書籍が書斎の机の上に置かれている。先日までは群衆心理学の書籍を読み進めていたが、ここからはバスカーの批判的実在論、ハーバマスやアドルノそしてホルクハイマーが提唱した批判理論、そして様々な思想家がどのように美を捉えていたのかについて美学的な探究を進めていく。それらは全て、実践霊性学と実践美学と紐づけた形で探究を進めていく。

先ほどふと、欧米でのこれまでの8年間の生活と、途中で1年間ほど日本にいた期間を合わせると、実質9年間ほどコロナ生活をしていたことに気づく。私は、コロナの前と後でほとんど生活の仕方が

変わっていない。とりわけ、物理的に人と接触することを極力避けてきたということはもちろんのこと、文字通りのソーシャルディスタンスを図ってこれまで生きてきた。それによって自己と社会を対象化させ、そうすることでしか得られなかったであろう様々な気づきを得てきたように思う。それらは自己と社会の双方に関する気づきであり、そのような形で得られた気づきを言葉の形にすること、さらには音楽や絵の形にして他者に共有していくことが自分の役割の1つなのだろうと改めて思う。

先日、ハーグに住む友人が欧州永住権に関する日記を執筆していた。その記事を読み、自分もオランダ永住権と欧州永住権の申請ができるまで後少しだということに気づいた。この地での生活は極めて平穏であり、落ち着いた心で自分の取り組みに邁進していく上で、この地は最適の場所である。理想としては、オランダに加えて、フィンランドかどこかの北欧諸国にもう1つ居住場所を確保したいと思っている。

今この瞬間も小鳥たちの鳴き声が聞こえてきているが、今よりもっと自然を感じられるような場所で生活をしたいと思う。いずれにせよ、残りの人生においても、精神的・実存的に必要なソーシャルディスタンスを取り続けた生き方をしていきたいと思う。そうした生き方を通じて得られた気づきを言葉・音・絵の形にし、共有し続けていく。フローニンゲン:2020/7/12(日)06:37

5992. 全ての「存在者」に居場所を与えること:俯瞰的・包摂的な新しい物語の協働創出

時刻は午前8時半を迎えようとしている。今、優しいそよ風が書斎の前の世界をゆっくりと歩いている。

今日もまた非常に肌寒いのだが、空は晴れ渡り、優しい朝日が地上に降り注いでいる。今朝は午前4時に起床し、すでに4曲ほど短い曲を作り、4つほど絵を描いていた。そして、日記に関してもすでにいくつか執筆していた。日記の量が最近また少し増えているのは、明らかに読書のおかげだろう。読書が知的な刺激となり、それに促される形で自分の考えというものが内面から外に押し出されてくる。

生まれようとしてきたそれらの言葉に絶えず形を与えること。それはとても大事なことである。その点と関係することについて先ほど少し考えていた。

一昨日の中土井遼さんとの対談の際に、存在論の観点から全ての存在にふさわしい居場所を確保することについて話をしていたのだが、「全ての存在」という言葉が、何か人を指すものと誤解してしまった参加者の方もいたのではないかと改めて思う。その言葉が意味しているのは、人はもちろんのこと、他の生命を含め、さらには概念や社会課題に対する解決策等々のものが含まれる。文字通り、物質的・非物質的なものを問わず、全ての存在である。そしてさらには、存在者というのは何も今この瞬間に存在しているものだけを指しているわけではない。それは、今この瞬間に顕現していないものも指す。つまり、生命・非生命、物質・非物質、現存在・未来存在(及び過去存在)を含め、それらの全てを総称して「存在者」という言葉を用いていたのである。

日々自分が行っている言葉・音・絵を通じた創作活動も、実践霊性学や実践美学の探究も実践も、いまだ居場所のない存在者へ居場所を提供する行為であり、とりわけ今この瞬間に現れていないものを在らしめるという「不在の不在化(absenting absence)」の行いなのだ。

新たな言葉や概念もれっきとした存在者の1つであることを考えると、この日記の執筆というのはまさに存在者に居場所を与えるという行為なのだろう。そして言葉にならない存在者を音や絵の形にし、彼らが躍動するための場所を提供するのがアーティストの1つの大切な役割なのだろう。秋に一時帰国した際に、あるアーティストの方と対談講演をさせていただくことになっているので、この話題に触れることがあるかもしれない。また、現代社会に対して新たな物語を提示することや、既存の物語に欠けている点を指摘することも、社会実践的な不在の不在化である。この点についても少ばかり考えていた。

新たな物語の提示や、既存の物語で盲点になっていることを指摘することは、その物語の住人にとってみれば、大きな揺さぶりとして知覚されるのかもしれない。その揺さぶりの程度を考える必要があるのだが、今回のコロナの騒動に対する各国の対策を見ていると、早急にかつ大きく動いた国々がコロナの被害を最小限にしている姿を見ると、成長発達の原理原則である「発達はゆっくりな方がいい」という考え方に基づいて緩やかに物語を変容させていくという道もある一方で、大きく物語を変容させていく必要性もやはり感じる。

物語が崩壊してから物語を紡ぎ出すことは手遅れだと思われる。いつも人間は、喫緊の課題と評して、課題が喫緊のものにならないと動き出すことができないが、地球規模で問題の複雑性と難易度

が上がっている状況を見ると、近いうちに「喫緊の課題」という言葉がなくなってしまうのではないかと
思うのだ。もしかしたら次の大きな課題によって人類もろとも地球ごと命が絶たれてしまうかもしれ
ないのだから。そうならないために、現在私たちの社会を取り巻く物語を冷静に見つめ直し、それ
に取って代わるより俯瞰的・包摂的な新しい物語を協働して紡ぎ出していくことが大切になるはず
だ。フローニンゲン:2020/7/12(日)08:47

5993. 中土井遼さんとの対談を振り返って:2つの変容的なあり方の統合に向けて

時刻は午前10時半を迎えた。日曜日の朝の世界はとても優しい。

先ほど、改めて先日の中土井遼さんとの対談を振り返っていた。対談内容を振り返っていたというよ
りも、中土井さんのあの場でのあり方を振り返っていたのである。当日の対談では、あり方 (way of
being) の話にも触れた。その中で、私が1つ中土井さんから大いに学ばせていただいたのは、「保
留する (suspending)」というあり方だった。

えてして私は人との対話や何か1人で説明をする際に、既存の認識の枠組みやこれまでの体験に
基づいて話をしてしまいがちなのだが——それは自然なことであり、自分の専門性や体験に基づい
て話をするのが重要な場面はもちろん多々ある——、こうしたあり方では新たな学びや新たな自己
に向かっていくことが難しいのではないかと思ったのである。端的には、自己を学びや変容に開い
ていくためには、中土井さんが対話の中で行っていたような、既存の自分から湧き上がってくるもの
を保留し、それをいったん脇に置いておくというようなあり方が必要だと思ったのである。すると驚い
た偶然として、ロイ・バスカーも全く同じことを述べていたのである。

昨日より、バスカーの“The Philosophy of MetaReality: Creativity, Love and Freedom”という書籍を
読み進めており、これは単なる哲学書ではなく、実践霊性学の優れたテキストでもある。得るものが
非常に多い書籍なのだが、つい先ほど読んでいた文章の中に上記と関係する事柄が書かれてい
たのである。

バスカーは、「私たちは既存の思考を通じて学ぶのではなく、既存の思考を保留する形で学ぶ」と
いう趣旨のことを述べており、これは中土井さんが体現しておられたあり方と多分に重なる。こうした
あり方は、バスカーの言葉を借りれば「変容的なあり方 (transformative way of being)」と言えるかも

しれない。こうしたあり方はこれから強く意識していこうと思う。これまでの私は、いつも即興的に話することによって、それが既存の自分の認識の枠組みや体験に強く立脚したものであったとしても、自己の最奥部から自然と生み出されるそうした即興的なものが自己の枠組みを内側から押し広げていくのではないかという考えに基づいたあり方をしていたように思う。

こうしたあり方も、おそらく変容的なあり方の1つだと思うが、即興的に生まれてくるものをあえて保留し、即興的なあり方では生み出され得ないものが現れてくるのを待つというあり方もできたらと思う。ここではまさに、発達の原理である「待つ」という姿勢が関与している。そうしたこれまでの自分になり方を、これまでの自分のあり方の対極に位置付けると、2つのあり方を統合する道として、即興的でありながらも待つということ、あるいは即興的に待つということを自ずから行えればと思う。こうした2つの変容的なあり方を統合したあり方を持ってして自己と社会の探求を続けていけば、自己の可能性を絶えず開きながらにして、新たな方法で社会に関与していくことが可能になるような気がする。フローニンゲン:2020/7/12(日)10:47

5994. スイス旅行と秋の対談講演会に向けて: 「不在化」と「なること」

気がつけばアテネ旅行が再来週に迫り、日本への一時帰国の日もあと3ヶ月ほどだ。アテネと日本への旅行の間に、もう1つばかり旅行を入れようかどうか迷っている。それはスイスのアスコナとドルナッハに訪れるものである。前者に関して言えば、アスコナの地はかつて、一流の学者を集めた「エラノス会議」が開催されていた場所でもある。

この会議は、先日に読み進めていた『聖なるもの』の著者であるルドルフ・オットーの呼びかけのもとで開催されたものであり、この会議にはカール・ユング、ジョゼフ・キャンベル、マーティン・ブーバーなどが参加しており、日本からは井筒俊彦先生や鈴木大拙、そして河合隼雄らが参加している。

アスコナに行くのは、実践霊性学に関心を持った今の自分にしてみれば、何か必然のようにも思える。特にこの地で何を見ようとか、何をしようということはないのだが、単に人間の霊性を真摯に探究した者たちが一堂に会した場所に行き、目には見えない形で今もそこに残っているであろう何かに触れ、それを感じたいと思っている。そしてドルナッハについては過去に何度も言及しているように、ルドルフ・シュタイナーの思想を探究できる精神自由科学大学がそこにあり、いつかここで学びを得る機会があるような予感がしているので、下見がてら足を運んでみようと思っている。こうしたス

イスの旅を9月の初旬に入れるかどうかを現在考えている。この9月にそれが実現しなかったとしても、それはどこかのタイミングで必ず実現するだろう。

今この瞬間に内在しているのだが、まだそれが不在として存在しているがゆえに、私たちは不在の不在化を通じてそれになれるのだという気づき。言い換えれば、不在化(absenting)というのは、なること(becoming)なのだ。それは個人だけに当てはまるものではなく、この社会にも当てはまる。いまだ出現しない社会というのは、すでにこの社会の中に内在しており、それは内在しているのだが、不在の状態なのだ。それを「内在的不在」と呼んでもいいかもしれない。

そうした内在的不在のものを不在化させることによって、つまりそれを在らしめることによって、今の社会は出現する社会になる。バスカーが指摘するように、不在というのは変化にとって不可欠なものであって、変化を起こす際に、不在の不在化は必須のものとなる。この点に合わせて、学習というのは内在化させることなのだという気づきを改めて持った。学習とは、学習内容を内在化(internalization)させ、それを体現(embodiment)することなのだ。

秋の東京での対談講演会と大阪でのセミナーに向けて、これから日々マイクロな成長を積み重ねていき、メソな変容を迎えた上で当日を迎えたい。対談者の方への質問の観点が変化し、深化することを願い、さらには自分自身の内側から出る言葉もこれまでとは違ったものになればと思う。フローニンゲン:2020/7/12(日)11:08

5995. 最も「効率的」かつ「早い」成長・発達の方法

時刻は午後3時半を迎えた。先ほどまで日光浴をしながら読書をしていた。読書をする前に、いつものように少しばかり仮眠を取っていた。ビジョンが立ち現れ始めたところで、仮眠の知らせを告げる音楽が鳴り始めた。そのビジョンはどこか水を想起させるような感覚質とイメージを持っていたように思う。

午前中に引き続き、午後にもバスカーの書籍を読んでおり、とりわけ愛の現象学の章を読み進めていた。その章の中で、人間の成長・発達に関する鋭い指摘があった。それは、いかに「効率的に」かつ「早く」成長・発達を実現するのかに関するバスカーの考えを表明したものだ。

私自身、「どうやったら早く成長・発達できるのか？」というのはよく聞かれる質問であり、その際には諸々の観点からそれに対して答えるようにしている。それらについてはここで1つ1つ取り上げることをせず、バスカーの考え方が興味深いものだったので、彼の考えに補足する形で自分の考えを書き留めておきたい。

いかに効率的にかつ早く成長・発達を実現するのかについて、バスカーは端的に、「絶えず自分であること」あるいは「絶えず存在の基底(自己及び全存在の基底、すなわち非二元の基盤)に佇んでいること」を挙げる。この明快な指摘に驚いき、同時にひどく同意した。そうなのだ、人はいつも成長・発達を効率良く実現させようとする際に、自分から離れていくのだ。そこでことごとくなされる実践は、自分から離れた形でなされるか、自分から離れていくような類のものばかりなのだ。

このバスカーの指摘は秀逸だと思う。この指摘に対してどのような反応を示すかによって、それは私たちに様々なことを教えてくれるだろう。仮にこの指摘を当然のことだと思い、同意するのであれば、その人は自分自身として生きることができているのだろう。一方で、この指摘に難色を示したり、理解できないのであれば、それは自分自身ではない何者かとして絶えず生きていることを示しているのだろう。端的に言えば、自己を自分自身で疎外させる形で、自分ではない者として自らの人生の日々を過ごしているということである。

バスカーは上述の考え方に補足するように、物理学のエネルギーの例を用いながら、エネルギーを浪費せず、それでいて最大のエネルギー効率で成長・発達の道を歩むというのは、絶えず自己の基底に触れた形で自分自身であり続けることであると説明している。

自己の基底という安全基地を起点にして、絶えず自分であるがゆえに、自分の成長・発達の速度と寸分違わぬ形で進めること。それは確かに最大のエネルギー効率を発揮するだろう。それに対して人々はなんと多くのことを画策して、自分の成長・発達速度とは異なる速度で進むもうとすることか。そして、あれこれと画策して、どれほどまでに自分自身から離れていくような実践に乗り出していることか。

成長・発達において真っ先に学ぶこと・教えることというのは、絶えず自分自身である方法なのだろう。そして、絶えず自分であろうとすることすら手放すことがまたさらに重要なことである。“trying to

be”ではなく、“being being”であることが重要なのだ。花は咲こうと思って咲いているのではない。花はただ咲いているのである。

自分であろうとする意思が混入しない形でただあること。ただあり続けること。それが成長・発達においてどれだけ重要なことか。その一方で、注意しなければならないのは、この社会はどれほど私たちにに対して自分以外の何者かであらせようとするかだ。種々の標準化・画一化で運営されるこの社会は、絶えず私たちに標準化・画一化された何者かにならせようと仕向けてくる。

それは時に明示的ではあるが、多分に暗示的であり、その時には目には見えないバイオパワーのようなものがそこに働いている。そうした権力的力に自覚的になること。そして絶えず自分自身であり続けること。おそらくそれが、最も効率的な成長・発達之道なのではないかと思う。そしてそれは、古代中国の高僧南泉の「平常心。それこそが道(タオ)である」という言葉に繋がる考え方である。フーニンゲン:2020/7/12(日)15:54

5996. 努力なしの最大効率 (effortless maximal efficiency)

時刻は午後7時を迎えた。今日の起床は午前4時であり、そこから今の時間まで、非常に充実していた。日曜日をこのように過ごすことができたことに感謝したい。こうした感謝の念は、次の日の充実感につながっていく。

途絶えることのない感謝の念を持って生きること。それが充実した毎日を生きることの秘訣なのかもしれない。気持ちは何かを引き寄せ、感謝の念が充実感を引き寄せ、それがまた幸福感を引き寄せる。感情に秘められた力を実感する。

夕方、青空という無限のキャンバスに、白い絵筆で描かれたような飛行機雲が描かれていた。それを見ながら、世界が少しずつ平穏さを取り戻しているように感じた。そうではない場所もきっとあるだろう。そうした場所に平穏が一刻も早く訪れるようにと願う。

今日はこれまでのところ、10曲ほど短い曲を作り、絵に関しては8枚ほど描いた。本日の日記の執筆量は多く、これで8つ目の記事となる。それらに加えて、今日は「一瞬一生の会」の補助音声教材

として音声ファイルもいくつか作成していた。作ることだけがここにあり、そこに自分がある。絶え間ない創作を通じて、自己を新たに創出していく日々。

自分の内側から言葉・音・絵としての形が生み出されれば生み出されるほどに、自己が新たに創出されていく。創作活動と自己変容は足並みを揃えて起こるものらしい。2つの原理を考えれば、そこに共通性が見出されるのだから、それは当然のことかもしれない。

活動する思想家、あるいは実践する思想家の仕事に触れる形で毎日が過ぎていく。彼らの書物から得ることは多く、それを肥やしにしながら自らの探究と実践が深まっていく。

今日はこれからロイ・バスカーの書籍の続きに取り掛かろう。昨日から取り掛かり始めた書籍の初読をなんとか今日中に終わらせることができるかもしれない。仮にそれができなかつたとしても、焦ることなく明日に回そう。先ほどの日記で書き留めていたように、焦って前に進む必要はないのだ。焦りは自己分離から生まれる。自分が自分であり、自己と完全に一致していたら、焦りなど生まれようがないのだ。焦りとは、自分の内側を流れる固有の時間感覚から逸脱している場合に生じるものである。

バスカーの書籍の中で、ヨガのある教えについて言及されていた。それは、「努力なしの最大効率 (effortless maximal efficiency)」と呼ばれる考え方だ。私自身ヨガの実践者であるにもかかわらず、この発想を完全に忘れてしまっていた。自己の基底につながり、絶えず自分であり続ければ、そこには何も努力はいらない。そうした時に最大の効率性が発揮される。そこには無理も努力もなく、有機的かつ自然な効率性がそこにあり、それが最大の効率性を発揮してくれる。人間や社会の発達というのも、努力なしの最大効率を通じて本来実現されていくべきだろう。そこに焦りはないのだ。自己の深い部分で自己と一致し続けていくこと。そうしたあり方を意識して、明日からまた日々を過ごしていこう。フローニンゲン:2020/7/12(日)19:29

5997. 「悪書は良書を駆逐する」:「マインドフル」ではなく「マインドレス」というあり方

時刻は午後8時半を迎えようとしている。外はまだ明るく、今年は冷夏であるが、日照時間はまだまだ長い。

つい先ほど、ロイ・バスカーの書籍“The Philosophy of MetaReality: Creativity, Love and Freedom”の初読を終えた。こちらの書籍から得るものは本当に多く、本書は実践霊性学の重要な文献の1つになるだろう。今夜まだ時間があつたら、就寝前に絵を描く前に、ヨルゲン・ハーバマスの“Knowledge and Human Interests”の初読を始めたい。彼らのように、本当の仕事をした人たちの仕事に触れることができる有り難さを思う。

そこから自分自身の仕事について考えを巡らせる。自分はまだ何も仕事を始めていない。今はその準備の期間である。この準備の期間がどれだけ続くのかわからないが、学習に次ぐ学習、実践に次ぐ実践を、誰も見ていないところで毎日愚直に続けていく。

今年の秋に一時帰国する際には、いつものように日本を様々な観点から観察しようと思っている。これはこの8年間の欧米生活の中で、毎年日本に一時帰国する時に定点観測的に行ってきたものであり、時系列データとしては年単位なので数は少ないが、その分大きな傾向を捕まえることができる。とりわけ、日本の大型書店に立ち寄ってみて、今どのような本が読まれているのかに着目してみることは毎年行なっていることの1つである。

良識のある著者と出版社が日本に存在することは確かだが、彼らよりも大きな勢力を占めているのは、その逆の人たちなのではないかと思ってしまう。以前の日記で書き留めたように、食事を通して身体に何を取り入れるのかと同じぐらいに、読書を通して精神に何を取り入れるかが大事になる。その時に、昨今の出版物の中で勢力を占めているのは、「知的発癌性物質」あるいは「知的添加物」とでも呼べるようなものが多分に含まれている書籍なのではないかと思ってしまう。「悪貨は良貨を駆逐する」ならぬ「悪書は良書を駆逐する」というような状況が静かに進行していることを憂う。

その他にも、諸々の形の悪が社会に蔓延しているように映ることに問題意識がある。こうした問題意識に照らし合わせる形で、ハーバマスの批判理論を探究し、実践美学と実践霊性学の社会的な適用を模索していこう。

午前中にバスカーの書籍を読んでいる時に、「マインドフル」だけではなくて、むしろ「マインドレス」な実践をすることも大切なのではないかということ思った。この気づきは、バスカーでいうところの「存在の基底(非二元の沃野)」に触れる、ないしは留まり続ける方法から得られたものである。マイ

ンドを完全に満たす方向ではなくて、完全に空っぽにして、ただ今その瞬間に佇むようなあり方。それはもう実践と呼べるようなものではなく、1つのあり方である。

マインドをフルにする際に不純物を入れるぐらいなら、いっそのことマインドレスにしたらどうかと思ったのである。創作活動に没頭している時の自分の状態を観察してみると、マインドフルの状態ではなく、対象との深い一体感を通じたマインドレスの状態であることに気づく。それはまさに没入体験とも呼べるようなものであり、バスカーも存在の基底に触れるためには、言語的な思考を手放す必要があると述べており、その実現を後押しするものとして創作活動が挙げられるように思う。

私たちのマインドは、そもそもマインドをかき回すような形でマインドを満たそうとする習性が備わっており、マインドに溢れ出てくるそれら全てに自覚的になることはなかなか容易ではなく、それによって結局マインドが忙殺されては意味がないように思える。また、そもそも気づきの意識で芽生える気づきというのは、多分に言語的な思考が媒介しているため、それではますます存在の基底に触れにくくなってしまう。それであれば、いっそのことマインドフルになろうとする衝動を手放し、言語的な思考を介在させない形で、没頭・没入体験を通じて、マインドレスの状態を味わうのはどうかと考えたのである。

実際に、マインドフルネスとは逆の方向のマインドレスを志向する実践技法(例:マントラ瞑想—マントラは言葉ではあるが、それを唱えることは言語的な思考でマインド満たすことを目指しておらず、往々にして意味のわからない言葉を唱えることで言語的な思考を限界まで抑制することが目的になっている—、やズィクルなど)が存在するのは確かである。

マインドレスの実践は、自らを実験対象として検証していこう。作曲の際には、音を並べる際には言語的な思考が介在することが多いが、並べられた音が自分の美的感覚に合致するかの検証の際には、言語的な思考がほとんど介在しない。一方、絵画の創作においては、初めから終わりまでのほとんどのプロセスにおいて、言語的な思考が介在していないことが興味深い。ほとんど無の境地で、筆の赴くままに絵を描いている自己がいる。自らを対象にして実験・観察・検証を重ねることによって、マインドフルとマインドレスの対極を統合する形で、また1つ次元の異なるあり方が生まれて来ればと思う。フローニンゲン:2020/7/12(日)20:45

5998. 新しい不動産屋へ

時刻は午前7時半を迎えた。もうこの時間帯は辺りはすっかり明るくなっており、今は燦々と輝く朝日がフローニンゲンに降り注いでいる。赤レンガの家々も朝日によって輝いて見える。

今朝は風もなく、とても穏やかな1日になることを予感させてくれる。昨日は午前4時に起床して活動を始めたのだが、今朝はどういうわけか目覚めたのは午前6時半だった。久しぶりにそんな時間まで寝ていたように思う。

昨夜もいつも通り、午後9時半に就寝準備を始め、寝つきもすこぶる良かったので、随分と睡眠を取っていたことがわかる。昨日もまた随分と読書を行っていたのだが、そこで得られた学びを寝かせ、咀嚼していくためにそうした長時間の睡眠が必要だったのかもしれない。大抵私が長い時間の睡眠を取る時というのは、変化の予兆でもあるため、ここからまた自分自身が大きく変わっていくことを予感する。

今日は、午後に不動産屋に出かける。今の自宅を管理する不動産屋が今年から変わり、家賃の支払いをまだ自動引き落としにしておらず、毎月銀行のウェブサイトを通じて支払いをしていた。その際には銀行から支給されるカードを読み取る特殊な端末が必要であり、今後、例えば今年の秋の日本への一時帰国のように、長期間自宅を離れている時に家賃の支払いを忘れないようにするために、家賃を自動引き落としにしてもらおうと考えていたのである。その端末は比較的小さいものなので、旅行に持っていけなくもないのだが、荷物を増やしたくはないし、万が一その端末を紛失してしまう可能性を考えると、やはり自動引き落としの方が安全だと思われた。

これまでの不動産屋は街の中心部にあって、街の中心部に買い物に行く時にはよく店の前を通っていた。フローニンゲンに到着した時の夜に、不動産屋の手違いで、鍵を約束の店の店主に預けてもらっておらず、店員と一緒に急遽不動産屋の職員のヨスという男性の自宅に行き、彼に事情を説明し、彼に車で自宅まで送ってもらったことが懐かしい。その時の出来事や彼とのやり取りなどは、今から4年前の日記に書いていたことを鮮明に覚えている。

新しく自宅を管理することになった不動産屋は、近所のノーダープラントソン公園に面した通りにある。すでに不動産屋には連絡しており、訪問する時間を伝えているので、午後2時半過ぎに、ゆっくりと散歩がてらノーダープラントソン公園を歩き、不動産屋に向かいたい。不動産屋で手続きを済ませたら、帰り際にその足で近所のスーパーに立ち寄る。そこではオーガニックのリンゴ、ジャガイモ、トマト、玉ねぎに加え、オリーブオイルとヘンプオイルを購入しようと思う。今保存しているサツマイモを全て食べ終えたら、もうオーガニックのサツマイモは入荷されないとのことなので、その代わりにブロッコリーを食べ始めようと思う。

少しばかりそよ風が吹いてきた。そのそよ風に小鳥たちの清澄な鳴き声に乗っている。フローニンゲン:2020/7/13(月)07:50

5999. 今朝方の夢

時刻は午前8時を迎えようとしている。今朝は6時半過ぎに起床したこともあり、朝のルーティーンをしていると、もうこんな時間になっている。

今朝方の長い睡眠は変化の予兆でもあり、深い治癒をもたらすために必須のものであったと思うため、そのような時間に起床したことを何も気に留める必要はない。ここからいつものようにゆったりとしたペースで水の如く淡々と自分の取り組みに邁進していけばいいのである。諸々のことを今よりも少し手放してみること、受け入れてみることに、そして待つてみることに。それは無理のない範囲でいい。

現在の自己の器の許容量の範囲内で、手放しがたいこと・受け入れがたいこと・待ちがたいことに遭遇した時に、ちょっとそれらとの向き合い方を変えてみることに。そのようなことを日々行なっていれば、少しずつ器が拡張されていくだろう。

今朝方は1つ印象に残る夢を見ていた。夢の中で私は、最初のキャリアを過ごしたオフィスの中にいた。私は自分の机のあるところに向かい、そこに到着してみると、自分の机の乱雑さに驚いた。どうやら私は、再びこの会社に戻ってきたようであり、まだ荷物の整理ができていないようだった。机の上には資料や文献が山のように積まれていて、その他にもハサミやセロテープなどの細々としたものが散らばっていた。机の上を綺麗にしようとしていると、歳が10以上離れた先輩社員に声を掛けられた。最初はお互いに気さくに会話をしていたのだが、何かのきっかけで、徐々にその人の言葉

の中に、自分に対する嫌味のようなものが含まれ始めていることに気づいた。それに気づくと、私は会話を終えていく方向に話を持っていき、そこからすぐに会話は終わった。

しかしながら、その方に言われた言葉の後味が悪く、それについて少しばかり考えている自分がいた。それについて考えながら、引き続き机の上を綺麗にしていると、今度は別の先輩社員から声がかかった。その方は女性であり、入社年度は1年違いであった。その方から仕事の依頼を受け、それは何かと確認したところ、クライアント先が何かについて支払いをした金額を確認するものだった。領主書を3枚ほど受け取り、それを見してみると、1つの領収書にいくつかの金額が明記されていた。中には数百万円単位のものもあったが、会社の支払いとして考えてみれば、金額としてはそれほど大きくなく、特に気に留めずに金額の確認をその場で行なっていった。

机の上が汚いこともあり、即席で作業スペースを確保して、その確認に当たった。すると、私の近くにボスとある上司がやってきて、人間の成長・発達について話をし始めた。そこでボスが一言、「身近な発達の磨耗を大切にすることが発達上重要になる」ということを述べた。その他にもいくつか興味深いことを述べていたのだが、「発達の磨耗」という言葉はとても印象に残っている。その言葉を聞いた時に、小さな擦り傷が発達には不可欠なのだというイメージが湧いていた。その後、オフィスのトップの方が私の机の横を通り過ぎていき、笑顔で私に何か一言述べた。それを受けて、私もその方に言葉を返した。

領収書の金額の確認がひと段落ついたところで、私はトイレに行こうと思った。オフィスのドアを開けて、トイレのある方に向かったところ、近くに喫煙室があることに気づいた。そこに先ほど私に話しかけてくれたオフィスのトップがいて、葉巻を吸っていた。私はタバコや葉巻を吸わないのだが、その方にちょっと声を掛けてみることにした。すると、その方は再び笑顔になって、高級葉巻を私に差し出してくれた。それは有り難いと思いつつも、私は喫煙者ではないことを伝えると、その方はまたしても笑みを浮かべ、葉巻をゆっくりと吸い、煙を吐き出した。するとその方は、大きな煙の中に包まれ、姿が見えなくなり、どこかに消えてしまった。フローニンゲン:2020/7/13(月)08:11

6000. 清々しいノーダープラントゾン公園を散歩して

時刻は午後4時を迎えようとしている。優しい太陽の光が朝から燦々と降り注いでいる。

つい今し方、不動産屋から帰ってきた。今日は天気が良く、気温も23度まで上がったので、半袖で外出した。不動産屋に行ったのは、家賃を自動で引き落とししてもらうためであり、契約書にサインをする必要があったからである。銀行カードの番号の届出なども必要であり、このあたりはまだオンラインでやり取りをするのではなく、マニュアルで作業をする必要があるようだった。

不動産屋は、近所のノーダープラントソン公園のすぐ近くにあり、そこまでの片道25分のウォーキングはとてもいい運動になった。何よりも気候が素晴らしく、公園内の木陰を歩いている時はとても清々しかった。公園の芝生の上では、マットを敷いて上半身裸で寝転がっている人たちや読書を楽しんでいる人たちの姿を多く見かけた。この公園内にはレストランがあるのだが、そこも盛況のようだった。公園の雰囲気は、コロナの前後でほとんど何も変わっていないように思えた。そこには絶えず平穏さと寛ぎがある。そしてそれらが人々に癒しを与えている。そのようなことを思った。

不動産屋に到着すると、そこは開放的なオフィスであり、清々しさがあつた。すぐに対応をしてもらい、名前と住所を告げて、自動引き落としの手続きを速やかに済ませた。何やら、来月の家賃はまだ手動で支払う必要があるらしく、銀行へ登録する時間を考えると、自動引き落としが始まるのは9月分からとのことだった。私としては、日本に一時帰国する際に支払わないといけない11月分の家賃から自動で引き落とされれば何の問題もなかったもので、特にそれについては気にしなかった。もしかしたら8月分からも自動で引き落としができるかもしれないが、それについてはまだ分からず、案内はまたメールで届くとのことだった。

帰りは近所のスーパーに立ち寄った。そこまでの道中、改めてコミュニケーションについて考えていた。それは、人と人、人と他の生命、人とモノ、人と社会とのコミュニケーションである。関係性をより豊かなものにしていくこと。それがますます求められる時代になって来ていることを感じる。おそらく、ハーバマスの“communicative action”という言葉に惹かれるものがあるのは、そうしたコミュニケーション上の問題に対する問題意識が自分の中にあるからだろう。実践美学や実践霊性学も、突き詰めれば全ての存在者間のコミュニケーションをより豊かにしていくことに焦点が当てられていると言っても過言ではない。コミュニケーションに関しては、ハーグに住む友人が現在書籍の執筆に取り掛かっている最中であり、彼女がどのような書籍を書き上げるのか、今からとても楽しみだ。きっとその書籍には、自分の問題意識と繋がることが書かれているだろう。フローニンゲン:2020/7/13(月)16:04